

150部
限定

全シリアルナンバー入り

日本語・英語併記

日本相撲協会
相撲博物館コレクション

大

相

撲

錦

絵

Grand Sumo Dishes

Nihon Sumo Kyokai Sumo Museum Collection

春亭



勝川春章、東洲斎写楽、喜多川歌麿、歌川国貞...
貴重な相撲博物館所蔵コレクション

大相撲錦絵

躍動する力士が
熱狂する町人たちが
世界が憧れた
天才絵師たちが、豪華競演。
本邦初公開の錦絵も多数収録！



相撲が娯楽として隆盛を極めた江戸時代、大相撲はさまざまな著名な絵師たちにより描かれており、

総称で「相撲絵」と呼ばれています。

「相撲絵」は江戸時代の人々が楽しんだだけではなく、当時の情報を今日に伝えてくれる貴重なメディアでもあるのです。

現在日本相撲協会の相撲博物館では、

三〇〇点を越える錦絵を所蔵。

そのなかから選りすぐった二四九点を、

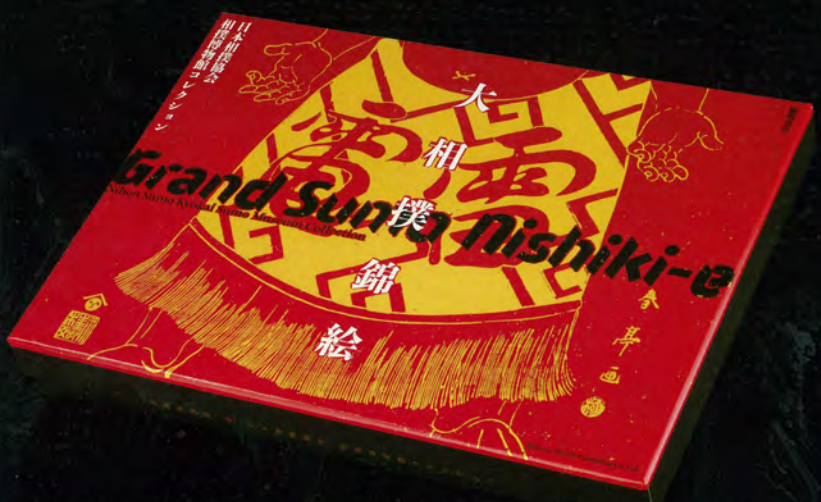
この度、豪華装丁本として一五〇部を限定刊行致します。

刊行によせて

このたび、わたくしども日本相撲協会監修による『大相撲錦絵 日本相撲協会相撲博物館コレクション』が刊行されるはこびとなりました。

日本における相撲の歴史はおよそ一五〇〇年と考えられておりますが、現在のようによくの観客が楽しむ大相撲が成立したのは、江戸時代中期のことです。徳川幕府による「平和」が続ぎ、人々は娯楽文化を楽しむことができ、大相撲は歌舞伎と並んで庶民の間で大変な人気を博するようになったのです。ちょうど多色刷りの版画である錦絵が明和二年（一七六五）に創始され、力士たちもその題材となりました。錦絵の誕生以降、浮世絵師の勝川春章や春英、東洲斎写楽、歌川国貞（初代）らが相撲にまつわる作品を数多く描いています。

日本相撲協会は、公益法人として国技相撲を維持、発展させるためにさまざまな活動を行っており、相撲博物館の運営もそのひとつです。本年は収蔵品のデジタルアーカイブ化の第一歩として、初代館長・酒井忠正の収蔵品を基礎とする相撲博物館の三〇〇点にもおよび錦絵の撮影を行いました。そのなかから厳選した作品を収録したのが本書です。大相撲の歴史を築いてきた名力士たちの肖像、土俵入りや取組はもちろんですが、稽古や巡業の旅、そして力士たちの日常生活が垣間見える作品も



鮮やかな朱に金箔がふんだんに施された、高級感溢れる豪華装丁の化粧箱に収納。

刷技術で再現。



雲龍久吉 横綱土俵入の図
歌川国明(初代)



雷電為右衛門
勝川春英



大童山文五郎
碁盤で蠟燭の火を消す図
東洲斎写楽



荒熊力之助
歌川豊国(三代)



大相撲関取御江戸両国橋通行ノ図
歌川国貞(初代)

世界に誇る芸術作品を、高精細の印

多数収録いたしました。大相撲を愛好する皆様をはじめ、より多くの方に手にとっていただければ誠に嬉しく存じます。

刊行までに多くの皆様にご協力を賜りましたことを、この場をお借りしてお礼申し上げます。色鮮やかな錦絵をご覧いただければ、当時の大相撲が目の前に甦ることと思えます。本書を通じて皆様が大相撲の歴史・文化をより深くご理解いただけますことを祈念し、刊行の言葉といたします。

平成二十九年十二月公益財団法人 日本相撲協会理事 長

八角信芳
(本書より)

相撲で見る江戸大衆文化

江戸時代後期は、文化が大衆化、つまり広く庶民まで親しまれるようになった時代です。「相撲絵」も江戸時代の庶民にまで広く愛好され、大相撲の評判はますます高まりました。

本書では初代館長・酒井忠正(一八九三〜一九七二)のコレクションを中心とする相撲博物館の収藏品から厳選した作品を、化粧まわし姿や着物姿、土俵入りや取組をはじめとする興行中の様子、稽古や巡業の旅、土俵を離れた日常などのジャンル別に収録しました。

作品にはそれぞれストーリーが読み取れます。力士の相貌だけでなく、一点一点が、描かれた背景や歴史を感じながらお楽しみいただける作りとなっています。

著名浮世絵師の作品も多く掲載、軸装や屏風などの大型作品も含めてカバーしています。編集コンセプトは、江戸大衆文化の中からとらえた大相撲。全七章の章立てで構成されています。解説は別冊子となっております。すべて相撲博物館学芸員による執筆です。

広く海外へ相撲文化を広める意味で英訳も併記しました。

▼章立て

- 第一章 一人立・大首絵
- 第二章 場所入り・土俵入り
- 第三章 取組
- 第四章 稽古・旅(地方巡業)
- 第五章 関取の休日と江戸二十四景
- 第六章 相撲余聞・歴史・逸話・戯画・子供相撲
- 第七章 二人立・三人立ほか

▼主な所蔵作品の浮世絵師

- I 歌川派・豊国・国貞・国芳、広重・国輝
- II 勝川派・春章、春英、春好
- III その他・東洲斎写楽、喜多川歌麿、月岡芳年

初代館長・酒井忠正のコレクションを 中心とする相撲博物館の 収蔵品から249点を厳選!



A3判豪華化粧箱入り

大相撲錦絵

日本相撲協会 相撲博物館コレクション

Grand Sumo Nishiki-e

Nihon Sumo Kyokai Sumo Museum Collection

監修/公益財団法人 日本相撲協会

判型:A3判豪華化粧箱入り

画集(A3判オールカラー324頁)・解説(B5判48頁)・

別刷錦絵2点同梱【150部限定刊行 全シリアルナンバー入り】

定価:本体185,000円+税 ISBN 978-4-19-864541-0

発行・発売:株式会社 徳間書店

販売代理店:株式会社 八木書店

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-8

土俵絵をあしらった
銀色の表紙



画集(A3判オールカラー324頁)
解説(B5判48頁)

別刷綿絵
2点同梱



雷電為右衛門
勝川春亭(初代)



大空武左衛門 牛跨ぎの図
春川英笑

[ご購入申し込み先] **八木書店** 総合営業部

TEL 03-3291-2961 FAX 03-3291-6300 pub@books-yagi.co.jp <https://catalogue.books-yagi.co.jp/>

ご購入申し込み書

<p>書名 大相撲錦絵 日本相撲協会 相撲博物館コレクション 【150部限定刊行 全シリアルナンバー入り】</p> <p>監修/公益財団法人 日本相撲協会 判型:A3判豪華化粧箱入り 画集(A3判オールカラー324頁)・解説(B5判48頁)・別刷錦絵2点同梱 定価:本体185,000円+税 ISBN 978-4-19-864541-0</p>	<p>お申し込み冊数</p> <p style="text-align: right;">冊</p>
<p>ご住所 〒 -</p>	<p>お名前(ふりがな)</p> <p>お電話</p>

【 F A X 注文書 】

大相撲錦絵 日本相撲協会 相撲博物館コレクション

税込 199,800 円 (本体 185,000 + 税 8%)

[] 冊 注文する

送料はかかりません (弊社負担)

ご発注者名	様	お申込日	20 年	月	日
ご所属		電話番号			
F A X 番号		E-mail アドレス			
ご自宅住所	〒				
お届け先ご住所 (上記と異なる場合)	〒				
	【電話番号】	-	-	【F A X 番号】	-
購入予算の別 (公費の場合、下欄 にもご記入ください)	私費 ・ 公費		※メールでも承ります → pub@books-yagi.co.jp 件名は、「大相撲錦絵注文」とお書き下さい。		

切り取り線

■ 公費ご購入 書式ご指定欄

◇ 必要書類 見積書 通・納品書 通・請求書 通 or 領収書 (ご必要な場合○)

◇ 日付 有・無 ◇ 書類上のお宛名

※消費税の表記は、特にご指示のない場合、税込表記にさせていただきます。

※領収書をご必要の場合、ご入金確認後の発行となります。郵便振替は着金まで数日かかります。

◇ 送料について : 商品代金に 含めて表示 ・ 含めないで別表示

◇ 機関指定の所定書式 あり・なし ※「あり」の場合下記の小社総合営業部宛てご郵送下さい。

■ クレジットカードをご利用の場合 V I S A M A S T E R U C

カード番号 - - -

有効期限 (月/年) / カード上のお名前

※ F A X ・ メールをご利用でない場合は、下記へご郵送いただくか、同封の「注文ハガキ」をご利用下さい。

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3 - 8 八木書店 総合営業部 宛

※お問い合わせ先電話番号 → T E L 03 - 3291 - 2961

話題の銀座 蔦屋書店 (GINZA SIX) 店舗限定商品を

部外で唯一販売許諾を受け、ご提供！

特報!!
永久保存版

150 部限定

日本語・英語併記

大相撲錦絵 日本相撲協会相撲博物館コレクション

Grand Sumo Nishiki-e

: Nihon Sumo Kyokai Sumo Museum collection

監修: 公益財団法人 日本相撲協会 / 発行・発売: 株式会社 徳間書店

販売代理店: 株式会社 八木書店

2017年12月26日刊 定価 (本体 185,000 円 + 税)

A3判豪華化粧箱入り・画集 (A3判オールカラー324頁) ・解説 (B5判48頁) ・

別刷錦絵2点同梱【150部限定刊行 シリアルナンバー入り】

勝川春章、東洲斎写楽、喜多川歌麿、歌川国貞… 貴重な相撲博物館所蔵コレクション

日本相撲協会の相撲博物館には 3000 点を越える貴重な錦絵が保存されています。日本相撲協会はデジタル化を行い、後世に残すことに取り組みました。その貴重な作品を、出版社である徳間書店が協力し、全点をアーカイブ化しました。

その中から相撲博物館学芸員が選りすぐった 249 点を掲載した 150 冊限定の豪華本を日本相撲協会監修で刊行いたします。著名浮世絵師の作品も多く掲載、軸装や屏風などの大型作品も含めてカバーしています。江戸大衆文化からとらえた相撲を全七章で構成し、化粧廻し姿や着物姿、土俵入りや取組など興行中の様子、稽古や巡業の旅、土俵を離れた日常などのジャンル別に収録。作品にはそれぞれストーリーが読み取れます。力士の相貌だけでなく、一点一点が描かれた背景や歴史を感じながらお楽しみいただける作りとなっています。

解説は全て相撲博物館学芸員による執筆です。広く海外へ相撲文化を広める意味で、英訳も併記しました。



This book represents a record of 249 carefully selected works from the Sumo Museum primarily from the collection of Tadamasu Sakai, the museum's first director. These have been divided into seven chapters, each devoted to a different genre, and they include portraits of sumo wrestlers wearing kimono and keshomawashi, pictures of sumo tournaments, including the ring-entering ceremony and sumo matches, and scenes of the wrestlers' lives outside the ring, including training sessions and tours of the provinces. Each work has a story. We hope that you will enjoy not just looking at the sumo wrestlers portrayed here but also exploring the background and the history each picture contains.

ご購入申し込み先: 八木書店 総合営業部 (注文用紙は表4にございます)

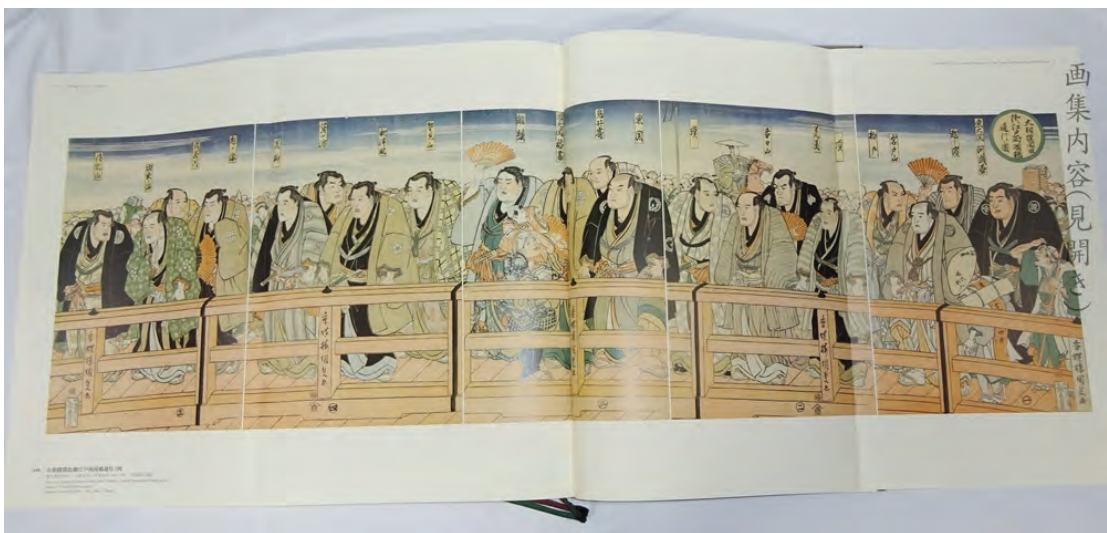
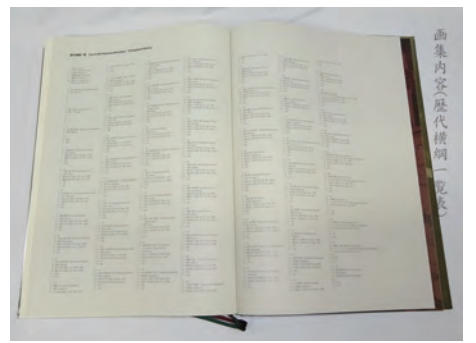
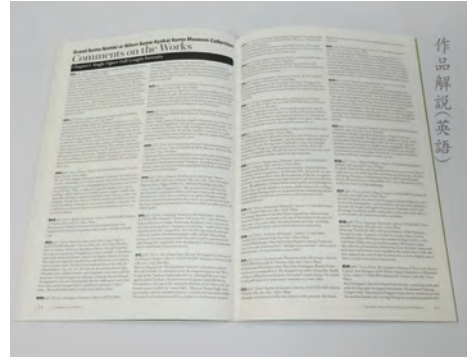


〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-8

TEL: 03-3291-2961 FAX: 03-3291-6300

E-mail: pub@books-yagi.co.jp

ページサンプル



江戸時代の大相撲と錦絵（画集序章より）

土屋 喜敬（公益財団法人 日本相撲協会 相撲博物館）

禁令を受けながらの相撲人気－江戸時代前期－

今日、スポーツであると同時に日本を代表する伝統文化として、世界中から注目を集めている相撲。その歴史は古墳時代にはじまり、1500年もの長きにわたって親しまれてきた。起源は力くらべであるが、奈良・平安時代に全国から相撲人を集め、宮廷の年中行事として相撲節（すまいのせち）が催されたことにより、相撲は人々の観覧に供する競技として成立した。さらには相撲節を模した形で、京都や全国各地の神社でも奉納されるようになった。

こうして競技として人々が楽しむようになった相撲は、室町時代には田楽や能などの諸芸能と同じように、寺社や橋などを普請・修復するために寄付をつる勸進興行と結びつく。相撲は観客が対価を払って観覧する競技・芸能として成長していたのだ。戦国時代には四股名を名乗る者が登場するなど勸進相撲は各地で催されるようになる。ところが江戸時代前期の慶安元年（1648）、多くの人が集まり喧嘩や口論が起きやすいという理由で幕府は勸進相撲を禁止してしまう。その後、再開したのは貞享元年（1684）のことである。このとき許可された理由には、相撲を生業とする人々と「かぶき者」などと称するアウトロー集団を引き離し相撲集団を統制する、当時開発が進められていた深川・江東地域で興行を催すことにより新興市街地の活性化を図る、の二点が考えられているが、その背景には相撲人気の高まりがあった。同じ頃、京都や大阪でも再開。慶長8年（1603）に誕生した歌舞伎も江戸時代前期に禁令を受けながら発展したが、相撲も同じ道を歩んだといえよう。

大相撲の成立－江戸時代中期－

再開した勸進相撲には、それまでにはなかった舞台が備えられていた。すなわち土俵が登場したのである。実は江戸時代初期まで、土俵は存在しなかった。勝負の境界線である土俵が出現したことにより「寄り切り」や「押し出し」のような新しい技が現れる。土俵際の攻防もみられるようになり観客はそれまで以上に勝負を楽しんだ。

江戸時代中期には本来の目的であった「勸進」は名目となり、番付表にも「相撲」ではなく「大相撲」と記された。大相撲とはもともと、出場者が多く規模が大きな興行を表す言葉であった。番付表に「大」の文字を冠して、相撲を生業とする集団による大規模な興行であることを広く知らしめたのだ。この頃には江戸・京都・大阪の三都で四季に一度ずつ興行を催し、その間には各地を巡業するようになり、まさに生業としての大相撲が成立したのである。以後、大相撲は相撲を生業とする人々および興行そのものを意味するようになっていく。寛政3年（1791）には将軍・徳川家齊が上覧相撲を催し市中で話題となった。こうして現在まで続く大相撲の基礎が築かれ、庶民の間でもますます人気を博したのである。江戸時代に入ると、それまでの「憂世」は「浮世」という言葉に変わっていった。つまり戦国時代まで、世の中はつらく、はかない憂世であったが、江戸時代に入って平和になると、現世を楽しみ、享樂的・肯定的にとらえる浮世と考えられるようになった。浮世を象徴する遊里や歌舞伎などを描いた菱川師宣は多くの門人を抱え、肉筆画のほか木版画の作品も数多く、後の絵師たちに大きな影響を与えた。師宣が活躍した17世紀後半に、江戸の風俗など現世の生活を描いた浮世絵が誕生。寛文～延宝年間（1661～1681）の師宣による「土俵の図」（相撲博物館蔵）は、土俵を描いた初期の作品である。

相撲絵の様式を決定付けた春章－江戸時代後期－

周知の通り、鈴木春信により多色刷りの版画・錦絵が考案されたのは、江戸時代後半に入った明和2年（1765）である。それまでも単色の墨摺絵に一枚ずつ彩色した丹絵、紅や草など二、三色を摺った紅摺絵があったが、錦絵の登場により完全な多色刷りによる版画が大流行した。一枚ごとに描く肉筆画とは違い、木版の錦絵は大量生産が可能で安価だったことから人気を博し、江戸から地方に帰る人々が土産として買うことも多かった。海外の美術館にも江戸時代の錦絵が数多く現存する。

当初、錦絵の主要な題材は美人画と役者絵であったが、オランダ経由でそれまでの藍色とは異なるベロ藍が輸入されると、特に天保年間（1830～1844）以降、風景を描いた作品が多数発表されるようになる。風景画に傑作が多い葛飾北斎や歌川広重がベロ藍を好んで用いたことはよく知られている。このほかにも武者絵や花鳥画、地震や外国船の来港を扱った時事的な作品など、庶民の要望に応じた錦絵のジャンルは多様で幅広い。

もちろん娯楽として人気を博していた大相撲もさまざまな絵師に描かれており、総称で「相撲絵」と呼ばれている。錦絵誕生以前にも、鳥居派の絵師による作品（288-290頁）があるが、相撲絵が本格的に描かれ、庶民に愛好されるようになったのは、その誕生以降のことである。相撲絵の様式がほぼ整うのは天明年間（1781～1789）のことで、役者絵を得意としていた勝川派の祖・春章の功績が大きい。春章の相撲絵が完成の域に達するのは天明3年（1783）と考えられている。谷風楓之助を好んで描いた春章は、役者絵に負けない高い完成度で力士を描き、江戸時代のプロマイドたる化粧廻しや着物姿の力士をはじめとして、土俵入りや取組の様子などの作品を次々と発表し、後の相撲絵の様式を決定づけた。もちろん相撲絵が多く描かれた背景には、大相撲が定期的に催され、谷風や小野川喜三郎など人気力士が登場したことも無関係ではなからう。さらに春章門下の春好や春英、春英の弟子である春亭の手により数多くの写実的な相撲絵が描かれた。春章の弟子で美人画を得意とした春潮にも「谷風 なのは屋おきた」（59頁）、「小野川 高島やひさ」（57頁）といった当時の人気者ふたりを競演させた大首絵の作品がある。春英が描いた「横綱ノ伝授」（相撲博物館蔵）からは、寛政元年（1789）の横綱誕生の様子をうかがうことができる。謎の絵師・東洲斎写楽も、寛政6年（1794）にはじめて江戸相撲の番付に載り、6歳にして120センチ・71キロの体格で大変な人気を博した大童山文五郎を好んで描いた（264頁、266頁）。

相撲場の情景が浮かぶ歌川派－江戸時代後期・明治期－

文化～文政年間（1804～1830）になると、美人画や役者絵と同じように、相撲絵の分野でも、歌川派の活躍がめざましくなる。役者絵で人気を博した豊国（初代）は、相撲絵の作品こそ少ないものの、大童山などを描いている（267頁）。豊国（初代）の弟子で、浮世絵師のなかで作品数が一番多いことで著名な国貞（初代、歌川豊国〔三代〕）は、相撲絵の数も随一である。相撲博物館の錦絵も約半数が国貞（初代）の作品だ。国貞（初代）が描いた「勸進大相撲八景」（188-189頁）からは、稽古や酒盛など、取組だけではなく力士の日常をうかがうことができる。このほか豊国（初代）門下の国安や国芳、国貞（初代）を継いだ国貞（二代）ら歌川派の絵師たちが力士や相撲場の風景などを描いた。明治時代に入ると錦絵に代わって写真や絵はがきが流行し、相撲絵は衰退に向かうが、国貞（初代）の弟子である国明（二代）や国輝（二代）が描いている。国貞（初代）の弟子・国郷による「両国大相撲繁栄之図」（72-73頁）は、回向院の相撲場を俯瞰した貴重な作品で、幟や櫓、賑わう観客の様子を今に伝えてくれている。同じく国郷の「江戸両国回向院大相撲之図」（70-71頁）は興行の一日を九つの場面で紹介しており、さながら相撲観戦案内の趣だ。国輝（二代）が描いた「金龍山浅草寺奉願縮図」（112-113頁）は、陣幕久五郎の横綱土俵入りを描いた作品だが、浅草寺に奉納された縦165センチ、横320センチもある非常に大きな絵馬の縮図である。絵馬と錦絵により、横綱・陣幕の名は広く知らしめられた。相撲絵は力士の肖像や土俵上だけにとどまらない。例えば国芳の「風流角力数面」（278頁）には力士の頭の部分が数種類あり、入れ替えると鬚の形を変えることができる。子どもをターゲットにした作品だが、実は文政～天保年間（1818～1844）に流行した仙女香という粉白粉の宣伝用に描かれたものだ。勝川派と比較すると写実性が乏しいなど負の評価を下す向きもあるものの、歌川派の作品から相撲場の情景や相撲を楽しんだ観客や子どもたちの様子まで目に浮かんでくる。また「金龍山浅草寺奉願縮図」からもわかるように、相撲絵は相撲人気を支えるメディアとしての役割も果たしていたといえよう。江戸時代後期は、文化が大衆化、つまり広く庶民まで親しまれるようになった時代である。相撲絵も江戸時代の庶民にまで広く愛好され、大相撲の評判をますます高めたのであった。そして相撲絵は、江戸時代の人々が楽しんだだけではなく、さまざまな情報を今日に伝えてくれる貴重なメディアである。

本書には初代館長・酒井忠正のコレクションを中心とする相撲博物館の収蔵品から厳選した作品249点を、第一章から第七章まで、化粧廻し姿や着物姿、土俵入りや取組をはじめとする興行中の様子、稽古や巡業の旅、土俵を離れた日常など、ジャンル別に収録した。作品にはそれぞれストーリーがある。力士の相貌だけでなく、一点一点が描かれた背景や歴史を感じながらお楽しみいただきたい。